

〈書評〉

中国と台湾の結節点——金門・廈門研究を通じて見えてくるもの

——黄英哲・張羽・謝政諭・葉肅科 主編／佐藤元彦・劉国深・黄秀瑞 編輯顧問『亞太區域、兩岸關係與廈門金門角色——愛知大學 廈門大學 東吳大學 金門大學 四校研討會論集』(アジア太平洋地域・兩岸關係と廈門・金門の役割——四大学国際共同シンポジウム論集) ——
(愛知大学国研叢書第5期第1冊、あるむ、2022.3)

松本 はる香

中国大陸と台湾の結節点とも言える金門と廈門。金門島とは台湾の一部であり、大金門島、小金門島をはじめとする大小12から成る島嶼の総称である。金門島は、地図上では台湾島から西に約270キロ離れたところに位置し、中国大陸からはわずか数キロしか離れていない。中国大陸の廈門の対岸の砂浜には「一国両制統一中国」(一国二制度による中国統一)と赤い文字で書かれた巨大な看板を目にすることができる。そして、廈門の港からフェリーで行くこと約20分余り、金門島の一部の小さな島に掲げられた「三民主義統一中国」(三民主義による中国統一)のスローガンの看板文字が目前に飛び込んで来ることから、この辺りが金門と廈門の境界線であることが見て取れる。

冷戦時代の初期、蒋介石政権が国共内戦に敗れて、中華民国を台湾へ遷都した後、金門島を毛沢東政権との前哨戦の地と位置づけた。それ以降、廈門に隣接する金門島は「大陸反攻」の軍事的基地として要塞の役割を果たすようになった。その後、中国の人民解放軍が、1954～55年と1958年の二度にわたって金門島等に向けて砲撃を行った。これが第一次・第二次台湾海峡危機の戦場としてよく知られている金門島の一面である。その際、対岸の廈門から多くの砲弾が撃ち込まれた。

かつて中国と台湾の間の直接通航は長らく禁じられていて、海峡兩岸を往来する際には、香港などの第三の地を経由する必要があった。しかし、

2001年に民進党の陳水扁政権下で「小三通」(通航・通商・通信の限定的解禁)が開始されて以来、中国人と台湾人の限定的な直接的通航が認められるようになった。さらに、2008年の国民党の馬英九政権の発足以降、第三国の外国人の船による通航も認められるようになった。同年8月、台湾の馬英九総統(当時)は、第二次台湾海峡危機50周年式典で「将来の金門と廈門は和解の門、平和の門、協力の門になる」と演説した。実際に、国民党が政権復帰して以降、本格的な「三通」(通航・通商・通信)が解禁されて、経済面における兩岸交流が急速に進んだ。しかし、2016年に民進党の蔡英文政権が誕生して以来、兩岸関係は冷却化し膠着状態となり、双方の往来は途絶えたままである。

本書は、このような中国と台湾との政治的往来が途絶える現状のなかで、金門と廈門に焦点を当てた、愛知大学、廈門大学、東呉大学、金門大学の四校の研究者による国際共同研究及び共同シンポジウムの研究成果の論文集である。時代の流れのなかで、変わりゆく中国と台湾の関係、そして金門と廈門の役割、並びにアジア太平洋地域の安全保障環境の変化や21世紀のグローバル政治経済の秩序の変容などについて論じられている。

*

元来、金門島に関する研究は、金門学などとして知られ、台湾を中心に発展してきたものの、金門と廈門の両方に焦点を当てた海峡兩岸関係に関する研究の数はこれまで非常に限られてきた。そのような状況のなかで、本論文集は、幅広いアプローチから、金門、廈門を起点とした兩岸関係に焦点を当てた複眼的な研究成果と言えよう。

本書の全体像としては、まず金門、廈門をめぐる歴史に遡り、現代の兩岸往来について分析がなされ、海峡兩岸関係における金門と廈門の役割や位置づけについて経済や安全保障、国際関係などの幅広い視点から議論が展開されている。それらを踏まえて、金門、廈門の近代化の過程における内部に包摂するさまざまな個別の問題に焦点が当てられ、掘り下げた分析がなされている。その上で、最後の部分では、より幅広いグローバルな政治経済学的な視点から、アジアや中華圏へのインプリケーションを念頭に置きつつ、欧州の統合問題や移民問題についても追加的な論考がなされて

いる。

本書の主な論点についてももう少し詳しく紹介したい。本書は大きく分けて以下の四つの内容で構成されている。まず、海峡兩岸関係の歴史と現在、とくに1954年から1958年までの中国の台湾戦略や1958年の「八二三炮戦」問題、2018年に公布された「恵台31条」政策問題、昨今の中国観光客の金門旅行などについての問題が論じられる。

次に、より最近の情勢として、海峡兩岸における廈門と金門について焦点が当てられる。金門と廈門との間の協力は、常に兩岸交流の重責を担い、兩岸関係改善の重要経路ともされてきた。しかし、2016年の民進党政権発足以降、中国と台湾の関係悪化に加え、2020年新型コロナウイルス感染症の影響もあって、金門と廈門の「小三通」は停止され、兩岸交流は中断している。ここでは、兩岸関係における発言権の変化や関係改善に焦点が当てられ、将来的な金門と廈門の間の関係の発展の可能性についての見通しが示される。また、歴史的側面にも焦点が当てられ、東亜同文書院院生の見た廈門、金門と廈門出身の華僑リーダーによる学校設立支援の問題、金門珠山村の老人社会問題についても論じられる。

最後に、国際関係論の視点からグローバル政治経済構造における欧州地域統合の形成の動きについて原因を分析し、21世紀の世界政治経済秩序の変化とEU政策との対話的關係に焦点を当てている。また、「一带一路」中継地である中東欧地域における新しい中国移民の展望についても補足的に議論されている。

*

以上の論点を示すとおり、本書は、歴史と同時代史の両方を含む幅広い視点から金門、廈門に焦点が当てられ分析がなされるとともに、それを通じて、海峡兩岸関係の關係改善や対話の糸口を見出そうという狙いがあり、それが本書全体に通底する大きなテーマであることが読み取れる。ただし、ここで扱われている内容が非常に多岐にわたるため、各章を束ねて総括するような、終章に当たるまとめの章が含まれていなかった点が多少気になった。そうした章を設けることによって読者の理解がより一層深まったかもしれない。ただし、本書の共同研究は現在進行形の継続案件であるこ

とからすれば、近い将来、研究上の全体的な総括も含めて、今後のさらなる研究の深化を強く期待したい。

昨今、中国と台湾の関係が冷え込み、その往来が一時的に途絶えているという状況が長らく続かなかで、そうした政治的要因に左右されず、あくまでも純粋なアカデミズムの立場から中国大陸と台湾の間で共同研究を行い、このような研究成果を生み出したということ自体を高く評価することができる。そのような意味において、本書は、金門、廈門を糸口として、中国と台湾の共存の道を紡ぎ出すことを試みた野心的な一冊と言えよう。海峡兩岸研究の研究蓄積のひとつとして注目に値する。